葛西因是の唐詩推重

――「通俗唐詩解序」と「柏山人集序」――

池澤一郎

一

葛西因是（かさいいんぜ）（一七六四～一八二三）。名は休文。通称は健蔵。因是は其の号である。一般には因是道人と称し、別に蒲蘆居士と号した。明和元年に仙台藩士にして当時上中ノ島丁の蔵屋敷詰だった葛西五左衛門の子として大坂に生まれ、二十歳頃まで高麗橋東に長じた。幼にして宇治の平沢旭山に句読を授けらる。後に長崎に遊び通事を学ぶ。寛政五年初めて江戸に来り、安永十年林家に入門するも不行跡の廉で離門。寛政末より享和三年ころまで蝦夷にて松前侯の禄を食み、仙台を経て、江戸築地に住まう。江戸では林述斎に再度入門するも、文化十四年、自著『中庸弁錦』において朱子注を奉じなかったゆえにまたもや破門された。文政六年四月六日六十歳で没す。墓は小石川伝通院別院・浄土宗法蔵院にある。老荘、周易の学を本分とし、著に『老子輯注』（文化十三年）、『荘子神解』（文政五年）があるが、経子史集百般に通じ、『源氏物語』「帚木」のいわゆる「雨夜の品定め」に評語を付した『雨夜閑話』が写本で伝わり、その斬新な読みには源氏学においても一定の評価が下されている。かように漢学者でありながら、老荘を奉じ、仏典にも詳しく、かつ源語の評を記すような因是の学問のありかたは、寛政異学の禁の後の江戸の儒学界では非難の対象となるだろう。容易に人を認めることのなかった太田錦城をして「葛因是、才学文章は一時の英雋なり…其の才気は則ち遠く時輩を超出す。今代の文人、当に冠冕たるは此の子及び佐藤一斎を以てすべきなり」といわしめるほどの才子でありながら、「但し其の文は雅俗を辨ぜず、是れ其の学の短とする所なり」と一定の留保を付せしめざるをえない異端の学者なのであった。

詩学においては、江湖詩社の活躍などによって宋詩推重の風が席捲していた江戸において、独りその風潮に抗するが如く、唐詩を重んじたが、それは盲信的、党派的なものではなく、あくまで個々の作品を彼一流の理論を通過させて読み破った上で打ち樹てたもので

あり、ために主として宋詩を典範とした江湖詩社の市河寛斎、柏木如亭、菊池五山、大窪詩仏等とも党派的対立を醸すことなく、活発に詩文の交わりを締していた。近時、揖斐高氏が一連の柏木如亭研究の中で、如亭の親友にして、日暮里養福寺に現存する「柏山人碑」の撰者でもある因是に言及すること多く、中に就いて『遊人の抒情柏木如亭』（岩波書店、二〇〇〇）第五章「詩法転換」において、如亭の詩風に変化がもたらされたのは、葛西因是との交友に由るものであることを論ぜられ、『通俗唐詩七律解』（享和二年）に見られる因是の詩論が、清の金聖歎の『貫華堂選批唐才子詩』、『唱経堂杜詩解』の強い影響下に成っていることをも指摘されている。これを受けて村田春海との交流という視座から因是に注目し、「葛西因是の『老子』注釈―『老子輯注』の方法とその位置をめぐって―」（『日本文学』43―12、平成六年十二月）を発表していた田中康二氏が、「葛西因是の『通俗唐詩解』の解釈戦略」を発表し、因是の唐詩読解の方法を追尋された。

本稿では、因是の唐詩推重のあり方が、「唐詩格調詩に理解を示すという柔軟性があった」と括られる程度のなまやさしいものではなく、同時代の宋詩一辺倒の風潮に強烈に対抗意識を燃やした、徹底した骨がらみのものであったことを示すべく、国立国会図書館蔵天香楼叢書中の『因是文稿』（明治十五年）所収の因是の文章の中から、最も長大な「通俗唐詩解序」と因是が友人の柏木如亭の詩集に寄せた二種類の序文とを解読してみたい。『因是文稿』は近代デジタルライブラリーの電子情報で閲覧が容易なので、引用は施された訓点で疑問の部分は、版本が存するものはそれを重んじつつ、改めて私に訓読を施し、必要に応じて原文に触れ、訳文を付することとする。

二

『因是文稿』上所収「通俗唐詩解序」については、先行研究に言及する所があるが、全文に検討が加えられているわけではないので、ここでは先ず全体を俯瞰することとする。『因是文稿』上のテキストは、字句と訓点との双方で少しく問題があると判断されるので、享和二年刊行の版本『通俗唐詩解』上の冒頭に冠されて「寛政十二年六月廿七日」付の因是の識語のあるものを底本とする。意味内容上、章段を八つに分けて、注解と私見とを付す。

学童の四書五経の句読を受けし後、稍（や）や字を識る者は、吟詩を学ばんことを請ふ。世を逐ひて速成せんと欲する者の若きか、則ち坊間鬻ぐ所の、詩学小成、唐明詩礎、具（つぶ）さに在り。是れ其の捷径なり。志を立てて益を求めんと欲する者の若きか、則ち三百篇以降楚辞・漢魏六朝、全唐詩の諸詩を読んで、而る後に乃ち今手を起こす可し。是れ其の正門大路。当時全唐の諸才子にして、先づ三百篇以降を読まざるは莫し。一時の名家の諸作、当時宋明の諸人に至りては、亦た此の路に由りて、此の門に入

りて進歩せざるは莫し。吾れ今再び正門大路上に就いて、一の方便の法門を開き、為に唐詩七言律百首を取りて、国字もて釈を作り以て之を授く。

ここまでは、因是が捉える当時の一般的な漢詩学習の段階、経路である。因是はそれを、流行を追って早く詩が作れることのみを目途とする「捷径」と、かくあるべきと考える理想的な道筋である「正門大路」とに二分しているのである。いわば、詩学にも王道と覇道とがあって、軽佻浮薄の徒は覇道たる「捷径」に従うものと考えていたようである。『詩学小成』は寛政九年刊の千葉芸閣（うんかく）の漢詩入門書。唐明詩礎は、宝暦六年刊（以後版を重ねる）の石川大凡編の『唐詩礎』または安永二年刊の玩世道人編の『唐詩礎』と、元文四年刊の田雲鳳・原五岳共編の『明詩礎』とを併せて修した呼称であろう。芸閣の著は初心者の作詩階梯書で、七言絶句を作るための詩語を、テーマ別に並べた二字のものと韻字を含む三字のもの、転句用に七文字目が仄字となっている三字のものを並べて集成したものである。すべての詩語に平仄が傍記されており、芸閣のいささか長文の「例言」は本書を使用する方法を縷述するものである。『唐詩礎』と『明詩礎』とは、韻字を含む三字の詩語を集成したものなので、作法を知って語を並べるだけの作詩なら、これでいいというのであろう。ただし、因是はこれらの簡便な作詩入門書が当時に行われていたことを相当つよく意識しており、この「序」の末尾で本書『通俗唐詩解』がこれらの書物を凌駕するものだと言い募っている。

しかし、因是はその「速成」を期しての「捷径」は次位に置いて、『詩経』、『楚辞』、漢魏六朝の諸作品、『全唐詩』を読破した後に、詩を作ることに着手すべきだとする「正門大路」を勧めているにほかならない。因是は唐詩をもっとも重んじる立場からして、唐の詩人は皆、『詩経』『楚辞』漢魏六朝の作品を読んでいるが故に、『全唐詩』を玉条とするのであるとするのである。徂徠学によって重んぜられるようになった明詩、現在流行の宋詩、それぞれの作り手も、この「正門大路」に由っているのだから、この学習課程を推賞するのだとしているわけである。

序に曰く、吾れ七八歳のとき、例に随ひて李家の唐詩選を誦す。十七八にして学伴と与（とも）に吟詩を学び、注釈唐詩選を取りて、之を読む。字訓典故、儘通暁することを得たるも、茫乎として作者の何の為（ため）に此の詩を作れるか、何の為に此の句を作れるかを知らざるなり。嘗て宿老先生に就いて解を請ふに、大率、詩の妙処は解す可きと解す可からざるとの間に在るを以て相答ふ。夫れ詩なる者は、志を言ふなり。志なる者は、一直画然として、左せず右せざるの謂ひなり。言ひて解す可く解す可からざるの間に在らば、方寸の持する所、其れ将に安（いづ）くにか之を発洩せん。已にして宋詩を取りて之を読み、心窃かに之を喜（この）み、漫然呦呦として、八五四十言、八七五十六言を属して、以て律詩と為すも亦た未だ心に厭（いと）はざるなり。

第二段で、因是は金聖歎に出会うまでの自らの詩学の道程を顧み

ている。ここには因是詩学の本質を知るのに格好の言辞が弄されている。少年時七、八歳の因是は、当時の例に倣って、詩学に入るに当たっては、『唐詩選』を暗誦したという。恐らく享保九年刊の服部南郭校訂本系統の無注本によって、素読を授かったということであろう。その後、十七、八歳で押韻平仄など作詩法を学んで、詩を作るようになると、『唐詩選』の注釈を読んで、詩句の訓み方や使われている典故などについてもそれなりに理解しうるようになったという。詩を解釈し、鑑賞するようになったのである。解釈鑑賞に先立って、意味内容も分からぬまま詩をそらんじているというのは、一般的な素読のスタイルであるが、その間に十年の歳月が隔てられていたのが、因是の場合なのである。ここから先に展開される穿鑿癖こそが因是を因是たらしめている、その個性が躍動するくだりであると思しい。一首一首の唐詩を読んで、その表面上の意味を理解しえた因是は、では何ゆえに作者はこの詩を作ったのかという動機をさぐりあてられずに苦慮する。そこで老儒碩学に問い質すと、「詩のよいところは、理解できそうでいて、理解できないところ、理解と不可解との間にあるのじゃ」と答えられた。理解魔の因是はこれには承服できなかった。詩歌の妙諦は曰く言い難い餘韻、餘情とでも呼ばれる部分にあるので理屈のみでは割り切れないとする詩歌観は、ここに因是が引く「宿老先生」に特有のものであるのではなく、当時通有のものであったことは、例えば、因是が本書を著すに際して対抗意識を燃やしていた『詩学小成』の「例言」に千葉芸閣も述べている所で、例えば「其ノ妙處ヲ得ルコトハドノヤウナ大儒先生ニ謁シテモ傳授ヲ得コトナラズ。自然ト我精ヲイタセシ力ニテ意悟スルナリ」とか「詩ハ諷詠スル物ニテ元来理ヲ云尽スベキタメノ具ニハアラズ。スベテ理ノ上ヘアラワレタルハ賤シキ物ニテヨク云トルマデナレバ手ヲハタト打タル計リニテ何モ感ハノコラヌナリ。スベテ詩文ハ君子ノ詞ナレバ必シモ匹夫匹婦ニヨク通ズル為ノモノニハナシ」という発言が見える。これらを念頭に因是は餘計にむきになったごとくである。

「詩は志を言ふ」とは『詩経』大序や『書経』舜典篇に見られる誰もが知る言葉だが、その「志」が詩を作る動機であるとすれば、それは一点の曇りもない明晰なものであるべきだと因是は考えていたのである。そうでなくては、詩を作る意味がないとまで考えていたといってよい。理解と不可解の間に詩の妙所があるとの答えに判然としないものをいだいたまま、因是は当時流行の宋詩を読んで、それを気に入って五言・七言の律詩を作るようになったというのである。時流に抗して唐詩を鼓吹した因是もまた宋詩にはまった時期があったということと、詩作の動機が明確でなければ、詩を作る意味はないという、その立場とがここで確認されるのである。

後に金聖歎先生の批唐詩を得て、之を読む。其の前後解に分かつは、真に唐の律詩を読むの妙訣なり。其の句と云へる、皆諷記有りて、並びに閑景を写す者無きは、真に唐の律詩を読むの卓見なり。其の律を、法律の律にして、声律の律に非ずと謂ふ

が如きは、則ち吾れ服せざるなり。夫れ律なる者は和声なり。細声なる者は、其の器を大にし、粗声なる者は、其の器を小にす。耳に盈ち心に当てて、窕せずして瓠せざるを、此れ之を和と謂ふ。有唐氏に至りて、別に一体を創し、八句を勒定し、名づけて律詩と曰ふ。律詩なる者は、有唐一代中和の声なり。律家は、沈・宋を以て宗と為す。僧皎然、言有りて云ふ、沈・宋は有唐律詩の亀鑑と為す。情多く、興遠く、語麗なり。多夏射鵰の手と為す。曹・劉の降格して之を為らしむるも、吾れ未だ其の孰れか勝れるかを知らず、と。是れに由りて之を観れば、沈・宋自り而前、三百篇而後は、人人能くする所の詩なり。沈・宋自り而後、全唐一代の律詩は、人々能くする所の詩に非ざるなり。律の言為る、格を併せて之を言ふなり。何をか之を格と謂ふ。興遠くして情多し。約句準篇、之を観れば、煌煌乎たり。黼黻文章、之を聴けば、洋洋乎たり。五音六律、此れは之れ律と謂ふ。独孤至の皇甫茂政集に序して云ふ、沈詹事、宋考功、財かに六律を成して、彰らかに五色を施す。之を言へば倫に中たり、之を歌へば而はち声を成す。縁情綺靡の功、是に至りて乃ち備はる。沈・宋既に没して、崔司勲、王右丞、復た関元天宝の間に崛起す。其の門を得て入る者、当代数人に過ぎず。皇甫補闕は其の一なり、と。律の名為る、至難至美の称なり。吾れ今唐詩百首に於いて論ずる所の者は、律の格なり。律の律に非ざるなり。情此に在りて文彼に在る者有り。文此に在りて情彼に在る者有り。情と文と此に在る者は、人皆之を見る。情と文と彼に在る者は、人或は知らざらん。彼に在るの情を以て、此に在るの文を照らさず。此に在るの文は、声を見ることを得と雖も、作者の主意、著はれず。彼に在るの文を以て、此に在るの情を照らさず。此に在るの情、之を見ることを得と雖も、作者の苦心見えざるなり矣。情文此に在るは、人人能くする所の事なり。情文彼に在るは、人人能くする所に非ず。復た之を能くする者有り。止だに之を能くする者有る無きに非ず、復た其の情と文と有るを知る者無し。律の格為る、実に有唐一代の諸才子、甚深微妙秘密にして、法門を得ざるなり。

第三段の冒頭、国立国会図書館所蔵の版本では「後得金聖歎先生此唐詩而読之」とあるのの、「此」字は「批」字の誤りかと思われるので訓読では訂した。因是が入手した金聖歎の唐詩に関する著述とは、『貫華堂選批唐才子詩』であって、書名中の「批」字を流用したものと解されるからである。版本『通俗唐詩解』に掲げられたテキストでは「比」を「批」に作っている。因是にとって金聖歎との遭遇は極めて重要な意義を担っている。ここで見る唐詩解読法のみならず、経書や諸子、源氏物語に至るまでの文献の解読法に大きな示唆を得ているごとくなのである。その間の消息は国文学研究資料館所蔵『雨夜閑話』（享和癸亥三年十月初五卒業）村田春海跋文に

士観評すらく、雨夜閑話は、結ぶに浮舟を以てす。五十餘篇も

亦た復た浮舟を以てす。此れ古来未発の言にして、奇想妙解なり。紫文は固より奇なり矣。然りと雖も此の評語を得るに非ずんば、則ち誰か能く其の奇を知らん哉。蓋し紫氏は、千歳の下に因是道人なる者の出でて、此の書を作為する者を竢つに似たり。唯だ恨むらくは聖歎氏をして一たび此の文辞を看せしめざりしことを。又た恨むらくは聖歎氏をして一たび此の評語を看せしめざりしことを。奇説中の奇説、因是道人に非ずんば、而ち誰か此の意を了せんや。

因是は村田春海と交友があり、その歌文集『琴後集』に序を寄せているが、右の一文からは因是が已に金聖歎を尊崇することひとかたならぬものがあり、それを春海も熟知していた事情が髣髴とするのである。

ここでも因是は、金聖歎の前後に分けて解すべきだとの主張には同調するのであるが、律詩の律を法律の律として、声律の律ではないとする金氏の立場には異議を唱える。金氏の主張は『貫華堂選批唐才子詩』甲集七言律巻二「魚庭聞貫」に見えるもの。異議を唱えるにあたって、因是が引き合いに出すのは、唐の釈皎然が『詩式』で展開する議論と、唐の独孤及が「唐故左補闕安定皇甫公集序」（『毘陵集』巻十三）という文章中の一節とである。前者は五巻本『詩式』の「律詩」という項目下に見える「有唐以来に泊んで、宋員外之間、沈給事佺期は、蓋し律詩の亀鑑ならん。但だ矢の虚しく発せざるに在りて、情多く興遠く語麗なるを上と為し、事を用ふる格の高下を問はず…凡そ此の流は、尽く是れ詩家射雕の手なり。仮使曹・劉をして格を降し来りて律詩を作らしむるも、二子幷駆して、未だ孰れか勝れるかを知らず」とあるのに、ほぼ文言が一致する。文言の違いは下と同様に因是の引用に際しての操作に由るのであろう。後者の該当箇所は「至沈詹事・宋考功、始財成六律、彰施五色、使言之而中倫歌之而成聲、縁情綺靡之功、至是乃備、雖去雅寝遠、其麗有過於古者、亦猶路鼗出於土鼓、篆籀生於鳥跡也、沈・宋既歿、而崔司勲顥、王右丞維、復崛起於開元天寶之間、得其門而入者、當代不過數人、補闕其人也」というものであるから、因是は引用に当たって、字句を変えたり、省略したり、削ったりして、引用部分だけを読んでも理解できるように工夫をしていることが分かる。

続いて、律詩は詩の中で「至難至美」のものであるとして、「情」と「文」とが、「此」にあるか「彼」にあるかで、さまざまな律詩を区分する。どうやら「情」とは作者の思想感情のようなもので、「文」とは表現方法を指すもののようである。「此」は卑近、あるいは具体的で分かりやすいことで、「彼」は隠微、あるいは深遠で分かりにくい状態を指しているもののごとくである。因是は選んだ百首の解析を通してさまざまな律詩のスタイルを説明しようとしているというのであろう。

金聖歎先生、頓に唐の律詩に前後解有るを悟り、証を六百首に取る。知言の士と謂ふ可きなり矣。昔在、孟子知言を以て自負して曰く、聖人復た起つも吾が言を易へざらん。金聖歎先生の

唐の律詩に於けるも亦た猶ほ孟子の聖人に於けるがごときなるかな。独孤至の云ふ所、之を言ひて倫に中る者、唐人の伝ふる所の約句準篇なる者、前後解も亦た其の一端を見はすなり。

第四段で、「孟子が知言を以て自負して云々」というのは、『孟子』公孫丑篇上で「何をか言を知ると謂ふや」と尋ねられて、孟子が「詖辞は其の蔽ふ所を知り、淫辞は其の陥る所を知り、邪字は其の離る所を知り、遁辞は其の窮する所を知る。其の心に生じて、其の政を害し、其の政に発りて、其の事を害なはん。聖人復た起つとも、必ず吾が言に従はん矣」と答えたというくだりを踏まえる。金聖歎が『貫華堂選批唐才子詩』において唐詩六百首を選んで施した「前後解」の律詩解読法は、たとい作者たる唐の詩人が蘇ったとしても、必ず聖歎の読みに異議をさしはさむことはないであろうというのである。

而して吾れの今釈する所の百首の、復た前後解を分かたざる者は、吾れの皇張する所、別に在る有り。夫れ詩を原ぬれば、六義有り、風・雅・頌三有り。各おの一体と為す。賦・比・興三、往来三体と為す。賦・比・興を用ふるは、臣隷の職なり。風・雅・頌は、主宰の位なり。百物を錯雑するを、之を賦と謂ふ。直叙して餘蘊無きの文なり。彼の物を以て此の物に比する、之を比と謂ふ。彼の物を観て此の志を興す、之を興と謂ふ。比と興と小異にして大同、皆諷託の文なり。

因是は第五段において、再び金聖歎の論に異議を唱える。因是が『通俗唐詩解』で試みた解釈の中には、金聖歎が採用した前後解の手法に従わないものがあり、それは因是独自の主張に基づくものなのだという。因是が拠り所としたのは、『詩経』大序の風・雅・頌・賦・比・興の六義であるが、詩の内容性質を定義する風・雅・頌であるよりは、詩の修辞方法を定義する賦・比・興に拠ろうとしている。特に直接事物を詠じる賦であるよりは、間接的に比喩を以て詠じる比興に着目して、個々の詩を分析することを主張しているのである。現今の比喩法では明喩に近い興と暗喩に近い比という手法に着目して唐の律詩を解析して行く過程で、必ずしも金氏の前後解に拘泥しないというのが、因是の言いたい所であろう。次の段において因是は三首ほどの例を挙げて、比興の分析のために前後解の手法を崩す場合の説明をしている。かような求心的なスタイルの論を展開するということは、書籍の序文としては異例のことに属するであろうが、因是の序文においてはしばしば見受けられることなのである。

且らく王右丞の「絳幘鶏人」の如きは、前四句は皆賦なり。「日色纔かに仙掌に臨んで動き、香煙袞龍に傍ふて浮かばんと欲す」の二句は比なり。其の餘の二句も亦た賦なり。崔司勲の「峇嶢たる太華」の如きは、前六句は華陰道中に望む所を写し、後二句は勧戒の辞を写す興なり。又た皇甫補闕の「秋日東郊の作」の如き、第一句の「閑に秋水を看て　心無事なり」は、流水の海に帰するを観て衣を払つて帰去せんと欲するを道ふなり。第

二句の「坐して寒松の手自ら栽えたるに対す」は守節報国して敢へて労を憚らざるを道ふなり。第三句の「廬岳の高僧　偈を留めて別る」は、守節国に報ずるに勤むるなり。第四句の「茅山の道士　書を寄せ来たる」は、衣を払つて帰去せんことを催促するなり。第五句の「燕は社日を知りて巣を辞し去る」は、猶ほ鳥すら且つ此の如くんば、我は策を決して帰去せんと欲すと言ふがごときなり。第六句の「菊は重陽と為れば雨を冒して開く」は、猶ほ草木すら且つ此の如くんば、我安んぞ鞠窮尽瘁して国の為に力を竭さざるを得んやと言ふがごときなり。第七句の「浅薄何を将てか献納と称さんや」は、我節を尽すと雖も竟に何の補ふ所ぞ。第八句の「岐に臨んで終日自り徘徊す」は、両端を持するなり。是も亦た義に於いて興を為す。再び細やかに之を思ふに、作者は先づ題中の「東郊」の二字上に向いて、「臨岐」の二字を索め得て、一二三四五六逐次に写し、一去一留して末に至る。浅薄を以て自ら品して曰く、我は能く秋菊の僅かに雨を冒す可きが如しと雖も、竟に寒松の雪を冒して凋まざるが如きこと能はず。此れ我の岐に臨んで躊躇して、両端を持して決せざる所以なり、と。毎句の約意此の如く深長にして、一篇の準縄此の如く精厳なり。此れは之れ言の倫に中ると謂ふなり。纔かに秋水を提すれば、其の白きは知る可し。纔かに寒松を提すれば、其の青きは知る可し。廬の黒為る、諸れを音に盧を呼ぶの盧に得ん。茅の白為る、燕の紫為る、菊の黄為る、復た辯を待たず。此れは之を彰らかに五色を施すと謂ふ。

因是が右の第六段において、前後解の手法よりも賦・比・興の分析スタイルを重んじた唐詩三首として言及するのは、王維の「賈至舎人が早朝大明宮之作を和す」と、崔顥の「行ゆく華陰を経」と、皇甫冉の「秋日東郊の作」とである。それぞれは、因是の『通俗唐詩解』の上巻二十六丁表、上巻十七丁表、下巻十丁表に見え、金聖歎の『貫華堂選批唐才子詩』では、巻四上、巻四下、巻五上に掲出されている。つまり、金氏はその著においてこれら三首を前後解の手法で分析しているのであるが、因是はそれに飽き足らないものを感じて、さらに言いおおすべきものがあるとするのである。詳細な検討は、各首において金氏と因是との主張を比較対照してなすべきなのであるが、右の第六段において、因是の主張のエッセンスが示されているので、これを見ることとする。皇甫冉の作は右の引用訓読文に全句が示されているのであるが、王維と崔顥との作は一部のみで議論を進めているので、全文を引用しつつ、因是の言わんとする所を求めたい。まず王維の作である。

絳幘鶏人報曉籌　絳幘の鶏人　曉籌を報じ
尚衣方進翠雲裘　尚衣方に進む　翠雲の裘
九天閶闔開宮殿　九天の閶闔　宮殿を開き
萬國衣冠拜冕旒　万国の衣冠　冕旒を拝す
日色纔臨仙掌動　日色　纔かに仙掌に臨んで動き
香煙欲傍袞龍浮　香煙　袞龍に傍ひて浮ばんと欲す

朝罷須裁五色詔　朝を罷めて須らく五色の詔を裁すべし
珮聲歸到鳳池頭　珮声帰り到る 鳳池の頭

因是は右の詩を分析して、第一句から第四句までは「賦」であるから、「早朝」＝朝政の実景を直叙するものと捉え、第五・第六句の一聯のみは、「比」であるとする。「比」については、『通俗唐詩七律解』の該当箇所から因是の講義内容を摘出する。曰く、「日色臨仙掌ハ、上ヨリ下ニ接ス、天子ノ詔草ヲ舍人ニ命ズルヲ模写ス、仙掌二字、把筆ノ意ヲ帯ス、香煙傍袞龍ハ、下ヨリ上ニ奉ズ、舍人一片ノ忠意ヲ模写ス」、と。一見する所、五、六句もまた宮殿の朝景色のように見えるのであるが、因是は、「日色」を皇帝の比喩とし、「仙掌」を賈至の文筆、「香煙」は賈至の皇帝への忠義の心情、「袞龍」はやはり皇帝の比喩としてとらえるべきだと主張するのである。尾聯は再び、朝廷の実景直叙となる。

続いて、因是が取り上げる崔顥の作は、次の通りである。

岧嶤太華俯咸京　岧嶤たる太華 咸京に俯す
天外三峰削不成　天外の三峰 削れども成らず
武帝祠前雲欲散　武帝祠前 雲散ぜんと欲す
仙人掌上雨初晴　仙人の掌上 雨初めて晴る
河山北枕秦關險　河山 北のかた秦関に枕んで険し
驛路西連漢畤平　駅路 西のかた漢畤に連なりて平らかなり
借問路傍名利客　借問す 路傍名利の客
無如此處學長生　此の処に長生を学ぶに如くは無からん

右詩について因是の説く所は、第一句から第六句までは、華陰道中で眺めた実景であるとするのだから、王維詩の伝で行くと賦ということとなる。しかして、尾聯の二句は「勧戒の辞」であるというのだから、都咸陽を見下ろすこの華山の中にあって、都市で「半生浮沈、一生奔波、出脱ノ路ナ」き世俗とは縁を絶って不老長生術を学んだほうがよかろうと勧める二句であるとするのである。前六句をひとまとまりとし、結尾の二句をひとまとまりとする点で、前後四句づつに分けて解する金氏の指摘しえない点を因是は指摘しえたとするのである。

次の皇甫冉「秋日東郊の作」に因是はもっとも詳細な検討を加えて、自らの唐詩解釈が金氏の上を行くものであることを主張するがごときである。叙述が詳細であるがゆえに、本文の注解とも重なる所が多い。田中康二氏の前掲稿では本文の注解に検討を加え、ことに「彰施五色」という評語に着目して本詩の色彩感覚への因是の批評に注目しているが、ここでは田中氏が触れなかった各句に籠められた寓意を剔抉する因是の序の文章に注目する。本文注釈のみならず、因是の序もまた本詩の優れた色彩感覚を指摘する。

第一句の「閑に秋水を看れば心無事」は、川の流れが海へと続いているのを見ている中に決然と官職を退いて隠棲したいとの思いに駆られたという意味だとしている。第二句の「坐して寒松の手自ら栽えたるに対す」には、自らの節義を守って国に尽そうとするのに、決して苦労は厭わないという意味が籠められているとする。第三句

「廬岳の高僧 偈を留めて別る」は、自らの節義を重んじて国家に尽すことを奨励する内容だとする。第四句は「茅山の道士書を寄せ来たる」というものだが、因是はこれを致仕隠棲を強く勧める内容だとする。第五句「燕は社日を知りて巣を辞し去る」について因是は、鳥ですら祭日の到来を「知って巣から離れるのだから、作者は決然として隠棲するにしくはない」との意味だとするのである。第六句「菊は重陽と為れば雨を冒して開く」は、菊のような草木ですら、雨を厭わず花を咲かせるのだから、人たる作者は死力を尽して国家のために身を捧げるべきだとの意味だと因是は考えている。第七句の「浅薄何を将てか献納と称さんや」は、自分が死力を尽くしたとしても、それが一体国家のために万分の一でも利益をもたらすであろうかという作者の悲観を籠めたものだとする。第八句は「岐に臨んで終日自(ひと)り徘徊す」は、隠棲をするか、国家のために一身を捧げるかどちらとも決し兼ねているとの思いを託したものと因是は考えている。

われわれはこの皇甫冉の詩を読んで、第七句と第八句とに強烈なメッセージが籠められていることにはすぐに合点が行くであろうが、第一句から第六句までは、そのまま字面通りに、秋の川の流れを眺め、寒空に屹立する松に向かい合い、僧侶や道士の言動があり、燕が去り菊が花開いたことだけを叙しているのであり、にわかに寓意を認めがたいとの思いに駆られるかも知れない。そのことを見通したかのように、因是はこの作の緊密な構成を説き尽さんとしてやまない。

まず、因是は、金聖歎が本詩を取り上げた『貫華堂選批唐才子詩』では、ほとんど採用せず、上書の姉妹書にして、こちらは杜甫の詩のみを扱った『唱経堂杜詩解』で特徴的な、詩題と詩本文との結びつきについて論じる。皇甫冉詩の題に「東郊」とあるのが、第八句の「岐に臨む」を導きだしたとするのである。「岐」が、因是の説くごとく、隠棲するか、国家に忠節を尽すかの分かれ道であると解するならば、「郊」とはまさに尽忠のための空間たる都会と隠棲のための空間たる山林とのあわいに位置しているというのであろう。因是の詩本文と詩題とは緊密な関係を有するべきであるとする主張は、『文鏡秘府論』南巻の「論文意」の中に「詩は題目中の意を銷(もち)ひ尽すを貴ぶ」に由来するであろう。

続いて因是は、第一句から第六句までは、隠棲と尽忠との間で右に行ったり、左に入ったりしている「一去一留」の姿を活写しているものだとする。そして最終一聯で、「浅薄」と自分の非力を悟るのは、自分の力を客観的に眺めれば、自分はあだかも雨に打たれても花を咲かせる菊くらいの実力を発揮するのが相場で、雪にも枯れない松のような貞節を貫くことはできないので、忠節への思いはあっても、やはり隠棲するにしくはないと迷っていると作者は述べていると解しているのである。因是説の当否は不問に付すが、あくまでも律詩の緊密な構成を重んじて前後の連関、詩題との脈絡を重視するその姿勢は貫徹されている。この読みが、たとい作者皇甫冉

が甦ったとしても、従わないものであるとしても、これはこれで首尾照応を貫く十分に魅力的な「深読み」であるには違いない。

さらに因是は「秋水」と白（水の色を白とする）、「寒松」と青（松葉の色を青とする）、「盧」と黒（盧は盧に通じて、さらに壚＝くろつち、驢＝黒馬、臚＝黒目に通じる）、「茅」と白（茅の葉と茎を白する）、「燕」と紫（羽の色を紫とする）、「菊」と黄として、各句に鏤められた詩語の蔵するめくるめくような色彩感覚を鋭く指摘しているということは、本文注解について田中氏も述べるところである。

唐人の苦心費力は、多く比興に在り。情緒多端、諷託幽遠にして辞語典麗なり。自然と読者をして瞥然として、眼迷ひ猜ひ出でざらしむ。律の律為るは、唐人のみ独り能くするの文にして、唐人のみ独り知るの事なり。唐以降、宋明の諸家、唐人の律詩を読みて、其の謂はれを知らず。七八は則ち七律為るを知り、五八は則ち五律為るを知る。如し之を宋明八句の詩と謂ふは、則ち可なり矣。之を唐様の律詩と謂ふは、則ち吾れ服せざるなり。刺繍するには必ず須らく針線を買ふべし。錦を織るには、必ず須らく杼軸を求むべし。

第七段。因是は再び唐人が意を凝らしたのは、詩の六義の中でも特に比と興とであったという自説を繰り返したのちに、律詩というスタイルは唐代独自のものなのであり、唐人にしかなしえない空前絶後のものだと主張している。だから、かつて徂徠学流行とともに行われるようになった明の詩、現在江戸で流行する宋の詩には、五言、七言を八句ならべた詩はあるかも知れないが、それらは緊密な構成を持つこと、あだかも全編に糸を付けた針を通して作った刺繍や、杼軸を使って織り上げた錦の織物のごとき、唐代の律詩とは全く別物で一段落ちると言挙げするわけである。

吾れ今釈する所の唐の律詩は、僅僅百首なりと雖も、之を読めば、而ち唐の律詩を読むの法を知る。此の法を以て全唐諸律詩を読まば、読む可からざるの律詩無し。之を読みて、唐人の律詩を作るの心を知らば、則ち手を起す所有らば、必ず徒だに五言八句、七言八句の詩なるのみに非ざるなり。之を読みて、唐人の律詩の難きと、唐人の律詩の妙とを知らば、則ち但だ唐人の律詩を取りて、之を読めば、必ずしも己れ自り出でざるも亦た可なり。之を読みて、唐人の律詩の為る可からざるを知りて、姑く宋明諸家の為る所を為りて、它日の一変を冀ふ者は、今自り以後、来りて唐人の律詩を言ふを許さざるなり矣。二三子我を以て故らに無稽の高論を設けて、告ぐるに及ばざるの法を以てすと為す勿かれ。吾れ今にして唐の律詩百首を釈し、吾が一片の老婆心、大いに夫の詩学小成・唐明詩礎の上に過ぐる者有り。二三子宜しく細細に之を読むべし。

第八段。最終段である。金聖歎が『貫華堂選批唐才子詩』で、扱った唐の七言律詩は六百首であるに比して、因是が『通俗唐詩解』で解釈した唐の七律は、僅かに百首である。しかしながら、その解釈方法は、右に見たように、金聖歎の前後解の手法に則りながらも、

それに拘泥せず、『詩経』大序の六義の中、比興を重視しながらの独自解釈方法を採用し、さらには詩の中に蔵された色彩感覚を掘り起こすというものであった。そのことに因是は十分の自信を抱いていた如くで、百首の注釈であるに過ぎぬと雖も、それをつぶさに読む者は、唐の律詩を読む方法をつかめるし、因是の方法に拠りつつ全唐詩中の律詩を読破するならば、すべてが解読できるとまで言い募っている。さらに、因是の方法に拠って、律詩を作るならば、それは、かつて流行した明詩や現今一世を風靡する宋詩のように、単に五言句、七言句を八つならべただけのものであることから脱するであろうとする。

ただ、因是の主張の面白いところは、本書『通俗唐詩解』を読んで、唐律の難と妙とを知らば、必ずしも自分で律詩が作れなくてもよいとしているところで、唐律のような緊密な構成を有する詩を作れないからと言って、安直に宋明のようにただ詩句を八つ並べただけの詩を作ることに逃避するなと勧告している点である。このことは、因是自身が、自説に拠って、詩を鑑賞することの有効性を認めながらも、それによって、取り上げたような緊密な構成を有する律詩を自分で作ることは極めて困難であると自認していたことを物語るのではあるまいか。つまり因是の唐七言律詩読解法は、詩を解釈鑑賞するには有効であるが、詩の実作に際してよき導きの指針となるとは思っていなかったかの如くなのである。

ただし、因是が自己の防禦線を引くかのように述べている「故さらに無稽の高論を設け、及ばざるの法」を述べたとの非難は誰からも出されなかったのではないか。右に見てきたごとく、因是の主張は、軽々に唐土の学説に寄り掛かるだけの、あるいは根拠のない党派的発言ではなく、実際の作品の細部に亘る検討から鍛え上げられたものであり、極めて具体的な裏付けを有するものであったのであるから。

三、

『因是文稿』上には、「如亭山人初集序」がある。ここには次のような一節がある。曰く、「唐詩を佳なりと謂ふ者あり。其の詩は具(つぶ)さに世に存して、皆之を誦す。而れども其の佳なる所以を識る莫し。其の佳なる所以を識る莫きが故に、之を欺るに、唐詩は佳ならずして、宋詩は真に佳なるといふを以てすれば、世或は以て然りと為さん。甚だしいかな矣、世俗の然りとすると然りとせざるとの定識無きや。余好んで唐詩を読みて、其の佳なる所以を識り、以て之を易ふること無し。嘗て其の説を挙げて人に告ぐ。人は皆以て然りと為さず。独り柏山人以て然りと為す。毅然として其の詩法を変じ、鄙俚を洗ひ、正音を為し、野狐禅を捨て、大乗禅に入る」、と。これは版本『如亭山人藁　初集』につけば、「文化三年春三月」の年記を有する文章なので、「通俗唐詩解序」を因是がしたためた寛政十二年よりも後のこととなる。「嘗て其の説を挙げて人に告」げたと

いう、唐詩が優れている理由は、「通俗唐詩解序」に述べられているものと同様のものと判断してよかろう。つまり、唐詩が優れているのは、とりわけその律詩が前後解、賦・比・興、色彩感覚といったさまざまな角度から解析するに足りる緊密な構成を備えるものであり、それは宋や明の詩には絶えて見られないという点にあった。

『因是文稿』上所収「柏山人集序」は、揖斐高氏が右の「如亭山人初集序」の別稿ではないかと推定されたものである（前掲『遊人の抒情』）。これについては揖斐氏の論が備わるが、如亭詩との影響関係という視座からの揖斐氏のアプローチとは事変わり、ここでは因是の唐詩推重とからむくだりを中心に別の角度から見直したい。まず注目すべきは次の一節である。

余（＝因是）嘗て山人（＝如亭）の為に詩法を論じて曰く、吾に詩法有るも、詩才無し。子に詩才有るも詩法無し。吾が詩法を以て、子の詩才に告ぐれば、其の成るに庶幾からん。

因是は如亭の詩才を認める。しかし、如亭には詩論がないとする。反対に自分には理論はあるが、詩才がないとする。これは因是が「通俗唐詩解序」で、「但だ唐人の律詩を取りて、之を読めば、必ずしも己れ自り出でざるも亦た可なり」と述べて、自分が唐の七律百首を検討して得た理論はゆるぎのないものだが、これを実作に援用しなくてもよいのであるとしたのと呼応する。つまり、詩の実作に自信がないというコンプレックスを抱いていた因是は、それだけ餘計に詩の解釈鑑賞には強い自信を有していたこととなる。因是は詩の実作においては、さしたる評判を得られなかった。そのことはその詩学をすら疑問視する冷笑にさらされることにつながったかもしれない。まさに「詩に別才有り。而して学に関はるにあらず」なのであった。それは穿ちすぎであるにせよ、宋詩流行の当時にあって、因是の唐詩推重論を受け入れる輩は少数派に属した。その少数派の一人が如亭であったのである。さらにもう一人を挙げれば、如亭に兄事した梁川星巌である。星巌には「因是庵の唐詩解を読んで後に書す」という絶句があり、「蟬嘶き鴉噪しくして漫ろに紛々、任是ばあれ鳳鳴誰か聞くを喜ばん。解く戛然として聾を振はすの語を作すは、人間唯だ葛休文有るのみ」（『星巌集』甲集蠡海集）という絶句があり、因是の『通俗唐詩解』を読んで、宋詩一辺倒の当時にあって、唐詩重んずべきことを自覚せしめられたことは著名な逸事である。

曰く、比興。曰く、定位。曰く、儷語。三者は詩法の由る所なり。曰く、軽艶。曰く、奔放。曰く、支離。三者は詩法の禁ずる所なり。詩に比興無く、徒らに軽艶を貴び、専ら耳目に媚ぶるは、美なりと雖も何をか用ひん。篇に定位有るは、猶ほ行陣の伍、階梯の級のごときなり。歴階顛蹶し、奔放乱次すれば、多しと雖も何をか用ひん。語は必ず伉儷なれ。支離不倫にして、名づくるに偏枯を以てし、罵るに吼文と為す。之を病と獣音とに比するは、乃ち六朝四六の法なり。

ここでは「通俗唐詩解序」において述べられていた、『詩経』大

序の「比興」に拠って、詩を解析するという方法をさらに掘り下げて紹介する。「比興」は「定位」、「儷語」と併せて詩の三法となるのだとする。反対に三禁は、「軽艶」、「奔放」、「支離」なのだという。「比興」が、明喩、暗喩を用いての奥深い表現技法であるとすれば、「軽艶」は、うわべのみを美しく飾った軽薄な表現技法であり、「定位」が本文の構成が緊密に連関するもので、詩題などとも呼応する所があるものとすれば、「奔放」は詩一首の構成などには意を払っていない乱雑な印象を与えるものとなる。「儷語」は対句表現についての対照性の見事さを言うのであろうから、「支離」とは対句が体をなさないことを言うのであろう。

韻有りて文を為すは、今の詩なり。韻無くして筆を為すは、今の文なり。体は途を異にすと雖も、法則は相通ず。故に属対なる者は、先に方類・的名・双擬・聯綿・互成・異類・双声・畳韻・字側・声音を審かにし、詩の対には宜しく之を辨用すべし。

詩と文とが「途を異にすと雖も法則は相通ず」としているのは、金聖歎が『貫華堂選批唐才子詩』甲集七言律巻二「魚庭聞貫」で述べる「詩と文とは、是れ両様の体と雖も、却て是れ一様の法なり」を承けるものであろう。なぜなら金氏は続けて律詩の「起承転合」の構成について述べていて、それもまた因是と揆を一にするからである。

有韻の文、つまり押韻はするけれども、散文に近いというのは、説理性の強い傾向にある宋詩についてよくなされる表現で、因是が同時代に流行している宋詩風を指している言葉である。また文章のリズムというものを無視して叙されるのが、同時代の文章の特徴であるとも因是は捉えていた。韻は踏むけれども文章のような詩や、あまりにも韻律から遠ざかった文章から脱するには、対句に意を凝らすべきだとしているのである。対句表現を「属対」として、因是はこれを十体に分類しているが、これらは「方類」「声音」を除いてすべて『文鏡秘府論』東巻の唐の上官儀、元兢、崔融などの詩論から抜粋した「二十九種対」の中に見られるものである。かような分類によって計算されつくした見事な対句は、なるほど平仄押韻以外に詩を詩たらしむる要素となるし、文章のなかではたたみかけるようなリズムを醸すであろう。因是はこの段では「三法」の一たる「儷語」についてさらに掘り下げていたのである。

定位なる者は、題に臨んで境を得、境に就いて科を別つ。約して之を論ずれば、起承転合なり。合は以て起承を収め、転は以て起承を転じ、承は以て起に接す。故に一聯を写すには、宜しく二聯の承接を思ふべし。承接の後、宜しく三聯の転換を思ふべし。転換の後、宜しく四聯の合収を思ふべし。起と承とは、猶ほ父母のごときなり。一体にして二ならず。転と合とは、猶ほ子と婦とのごときなり。亦た一体にして二ならず。父母は一世にして、子と婦とは一世なり。画然として両世相混淆せず。父母は慈を要す。子と婦とは孝を要す。骨肉団円、室に勃谿無し。

「三法」の一たる「定位」についても因是は掘り下げる。はじめに詩題があって、そこから詩境を得て、その詩境をさまざまな角度から表現するというのが律詩の作り方だという。詩題の重視は、金聖歎の場合は、『貫華堂選批唐才子詩』よりも『唱経堂杜詩解』に顕著な傾向であるが、因是は『通俗唐詩解』に杜詩をも拾っており、これは『貫華堂選批唐才子詩』に杜甫の詩が入っていないことから考えて、『唱経堂杜詩解』に拠るものと考えられるので、そこから学んだ態度かと思われる。右に見える律詩を二句一聯として、各聯が起承転合の関係にあるという議論は、金聖歎の『貫華堂選批唐才子詩』甲集七言律巻二「魚庭聞貫」に見える。曰く、「二起、二承、二転、二合。八句を勒定して、名づけて律詩と曰ふ」、と。又た曰く、「詩と文とは、是れ両様の体と雖も、却つて是れ一様の法なり。一様の法なる者は、起承転合なり。起承転合を除きては、更に文法無し。起承転合を除きては、亦た更に詩法無し」、と。「起承転合」の構成を父と母、子と婦との関係になぞらえるのは、因是の独創に係るであろう。

興を求むる者は、心を以て鏡と為せば、万景入る焉。意を以て写さば、江山草木皆世と人となり。「江間の波浪天と兼に湧き、塞上の風雲、地に接して陰る」（杜甫「秋興八首」其の一）は、天宝の乱を写すに非ざらんや。「草色全く細雨を経て湿ひ、花枝動かんと欲するに春風寒し」（王維「酒を酌みて裴廸に与ふ」）

■（『文稿』には一字を欠くが、恐らくは「景」字ならん）を

は、小人の道長じ、君子の道消ゆるを写すに非ざらんや。

「三法」の一たる「比興」は「通俗唐詩解序」でも重視された詩の分析あるいは構成方法であるが、ここでも具体的に杜甫と王維の詩句を拉し来たって説明している。詩人にはいいたいこと＝「意」があって、これを風景描写に託して表現することがあり、これを「比興」というのだという。杜甫「秋興」の長江の天にまで届かんとする波濤や要塞の上から立ち込めている風雲の表現は、安禄山の乱を暗示するものであり、王維の「酒を酌みて裴廸に与ふ」の草の様子で雨を受けてしっとりとし、高い枝に咲いた花が冷たい春風に揺らぐというのは、凡俗の徒が政界に幅を利かし、高徳の君子が冷遇されることを暗喩しているのだと因是は説明する。この王維と杜甫の詩は、いずれも因是の『通俗唐詩解』にも金聖歎の『貫華堂選批唐才子詩』と『唱経堂杜詩解』に取られている。この一聯のみを拾うと単なる自然描写の如くだが、律詩全体を見渡して、再度この詩を見つめると因是の主張には合点が行くであろう。因是は王維詩については、「草色七字ハ、不才得意ノ人ヲ写ス。花枝七字ハ有才失意ノ人ヲ写ス」と述べている。この因是の主張と直結する読みは金氏の叙述には見られぬ。

唐人の作家、三法を具へざるは莫し。蓋し精細を以て之を得たるならん。宋元明清は三法皆失す。蓋し之を粗奔に失せしならん。況や我の宋元明清を学ぶをや。

因是が時流に抗して唐詩を取って、宋元明清の詩を取らないのは、

右に見た「三法」、則ち「比興」、「定位」、「儷語」のどの点を取っても、唐詩にはそれが精細に備わるのに、宋元明清の詩にはそれがあっても粗雑なままであるからだという。

今人、杜の精細を学ぶに渝(か)へて、宋元明清の粗奔を学ぶ。吾れ之を誘ひ、之を栽(やしな)ふを知らず。杜子美に句有りて云ふ、「晩節漸く詩律に於いて細かなり」(「悶を遣る。戯れに路十九曹長に呈す」)、と。其の李太白に与ふ(「春日李白を憶ふ」)に云ふ、「何(いづ)れの時にか一尊の酒もて、重ねて与(とも)に細かに文を論ぜん」、と。夫れ李杜の文を論ずるに、別に法無し。杜公の自負、も亦た細を舎てて、別字無し。而して其の細は必ず晩節に於いてす。細の難きや、其れ知る可きなり矣。

因是は精細緻密に詩の三法を備えるがゆえに、唐詩を、中でも杜詩を最高の境地に達するものだと考えていたのである。杜甫の詩句を拉し来たって、この間の議論に鳧をつけている。杜甫の句に従えば、杜甫は何よりも詩においては表現構成の緻密、つまり三法の精細を求めていたのであるが、その杜甫ですら晩年になってようやく詩法が精細緻密になってきたとの自覚があったことを考えると唐詩のような立派な詩を作ることの難儀が知れるというのである。冒頭、因是は同時代の詩人が、粗雑な、韻は踏んでいるが散文のような、宋元明清の詩に学び、精細緻密な杜甫の詩に学ばない風潮を歎いて、なんとかしたいと思ってもお手上げだとしている。そうした風潮の中で、如亭が自説に耳を傾けてくれたことがうれしかったということになる。「柏山人集序」がこの後再び如亭に関することに筆を転じる所以であるが、それはここでの議論の対象ではない。

因是の唐詩推重のありようを「通俗唐詩解」と「柏山人集序」を中心に見てきたわけであるが、少年期の唐詩選の素読に発して、詩作を始めてからは、唐人は何ゆえに、どんな動機を懐いて詩を作ったかを知り尽くしたいとの思いに駆られ、先輩宿老に問うて、詩の妙諦は解すべきと解すべからざるとの間にあるとの答えにどうしても飽き足らないものを感じて、独自に唐詩解読を試みる折から、金聖歎の唐詩論との邂逅があり、その前後解の手法に感銘するものの、金聖歎の方法に囚われず、独自の唐詩解読法の体得を目指す。その結果、自らには如亭のような詩才はないにしても、独自の詩法が備わったとの自信を懐くに至るのである。それは結果としては荻生徂徠古文辞学派と同様に唐詩を推重する論となり、『通俗唐詩解』で扱う詩は金聖歎が『貫華堂選批唐才子詩』で取り上げた詩に、『唐詩選』『三体詩』に収載される詩人熟知の唐詩に限られることとなったが、それは「此篇八首聯絡シテ、全部秋興一篇ヲ成ス、一首ヲ欠クベカラズ、李家ノ選、其四首ヲ取ル、何ノ心腸ナルコトヲ知ラズ、自叙シテ三百年ノ唐詩其選ニ盡ト称ス、笑フベキコト甚シ、今全篇ヲ取テ、批釋ヲ下シ、學詩ノ後進ニ示ス」(『通俗唐詩解』下、杜甫「秋興八首」題下注より)」などと『唐詩選』の編集方法を嘲笑して斥けていることからも分かるように、決して古文辞学派の「詩は盛唐」を奉ずる一部末流学徒の如く根拠もなくして呼号し、盲目的に

追従する徒輩の標語のようなものではなかったのである。詩の構成や用語、語法、色彩感覚などあらゆる側面から実際の作品の読みに即して帰納されたもので、因是独自の見識が光る部分が多い。それが宋詩流行の時世にあって孤立無援のものであったとしても、合理的にしてかつ説得力にあふれていたものであることは、同時代の優れた才能であった柏木如亭と梁川星巌という二人の詩人をしてその作風を転換せしめた一事に徴して明らかなのである。

葛西因是を論ずるに際しての当面の課題は、『因是文稿』に見える館柳湾の中晩唐詩のアンソロジーに冠した独特の序文数種や「辨唐詩」なる一文に展開される『三体詩』論にも見るべき唐詩論が展開されていると思われるので、稿を改めてそれらに検討を加えることが第一に挙げられる。次に因是のかかる精緻な詩論が自身の詩作にいかに関わっているかは大きな関心事であるが、その詩集は写本のまま伝わらないので、『五山堂詩話』や『采風集』などに散見するわずかの作品について検証したい。さらには『源氏物語』の批評史に近代評論の先駆けとも評される斬新な読みを提示したこととかような唐詩論のスタイルとの関連をさぐるというテーマも筆者の前に横たわっているのである。